

令和元年9月19日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11629

研究課題名(和文) がん治療完了～長期生存のがんサバイバーシップケアモデルの構築に関する研究

研究課題名(英文) The development of cancer survivorship care model for completion of cancer treatment - long-term survival

研究代表者

三浦 浅子 (Miura, Asako)

福島県立医科大学・看護学部・講師

研究者番号：90512517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：医療や看護の機会が少なくなっている治療後～長期生存がんサバイバーのニーズに応えるために、がんサバイバーシップケアモデルとして、がんサロン(学習会、交流会、個別相談)と個別支援プログラムの構築を試みた。がんサロンは、広域サロン6回、院内サロン15回を行った。がんサロンの学習会は健康な生活を送るための情報提供となり、食事・栄養、運動などの関心が高かった。交流会はがんサバイバーや家族の悩みや不安の緩和に役立っていた。また個別相談は、がんサバイバーや家族の悩みに臨機応変に対応する機会となっていた。さらに、多重問題を抱える頭頸部がん患者の質的帰納的研究後に自己管理支援モデルの検証を予定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がんの診断は約100万人(2016年統計)、5年相対生存率は62.1%(2013年統計)であり、今後早期発見、治療の進歩に伴い長期生存者の増加が予測され、がんと共に生活する人々を支援するための医療・福祉の連携が重要と考える。しかしながら、がんの治療後は、医療や看護と接する機会も少なくなり、がん患者は日常生活の不安や悩みを抱えて生活している。そこで、生活の場を中心とした看護の提供が必要と考え、学習や交流の場や個別相談の場を提供するためのモデルの構築を図った。これらは、がん治療後のセルフケアの向上や異常の早期発見に役立つとともに、健康生活の維持、QOLの向上や医療費の削減にもつながると考える。

研究成果の概要(英文)：Cancer survivors live with post-surgery physical function loss, side effects of cancer chemotherapy, and anxiety of recurrence. The purpose of this study is to construct a cancer survivorship care model so that cancer survivors lead a healthy life. As a model, cancer salons in towns, and hospitals were established. The cancer salon was a study group providing information, holding an exchange meeting for cancer survivors and their families, and providing each cancer survivor with an individual counseling session to help alleviate problems they face. We held six town cancer salons and 15 hospital cancer salons. The study group had high interest in diet, nutrition and exercise. The exchange meeting helped reduce the worries and anxiety of cancer survivors and their families. Individual counseling was responsive to cancer survivors and family concerns. We plan to validate a self-management support model after qualitative inductive research for patients with head and neck cancer patients.

研究分野：臨床看護 がん看護

キーワード：がんサバイバー がん治療後 長期生存 がんサバイバーシップケア がんサバイバー間の交流 学習プログラム

1.研究開始当初の背景

(1) 日本のがん患者の5年相対生存率は、全体52%、大腸がん60%、乳がん80%を超え¹⁾、今後がん治療の進歩と共に5年相対生存率は高くなることが予測される。がん治療終了後の患者(下がんサバイバーとする)は、手術後の失われた機能、抗がん剤治療後の副作用、再発の不安などの悩みを抱えながらセルフケアを行っている²⁾。

(2) 著者らの先行研究によると、北米では、治療後～長期生存者に対して、後遺症の慢性的・間欠的な症状や晩発症状の管理、再発・2次がんの予防等のがんサバイバーシップケアが盛んに提供されている³⁾。また、日本等のアジア諸国ではがんサバイバーに焦点を当てたケアプランの開発や研究が進んでいないという指摘もある⁴⁾。著者らの2009年の日米のがん看護従事者の調査では、長期生存がんサバイバーへの看護介入が米国(ミネソタがん看護協会48名)66.6%、日本(日本がん看護学会81名)23.4%($P < 0.01$)で、日本の看護介入が少なかった^{5,6)}。また、2014年の日本のがん看護従事者の全国調査では、長期生存がんサバイバーへの看護介入が20.3%であり、日本では長期生存がんサバイバーと接する機会が少ないことが分かった^{7,8)}。

2.研究目的

本研究は、医療・看護が希薄になっている治療後～長期生存がんサバイバーのニーズに応えられるように、情報提供としての学習会、不安や悩みの緩和のための交流会や個別相談を提供するためのがんサバイバーシップケアモデルを構築することである。

3.研究方法

(1) がんサバイバーシップケアモデル：がんサバイバーへの学習と交流の場の提供

医療の手が希薄になっている治療後～長期生存がんサバイバーへの支援ケア(がんサバイバーシップケアとする)モデルとして、医療従事者に協力を求め、がんサバイバーの学習と交流の場(がんサロン；広域サロン、院内サロン)を提供した。がんサロンの参加者にアンケート用紙(性別、年齢、がん種、診断後年数、知りたい情報、学習会及び交流会の感想、研究者への意見)を配布した。性別、年齢、がん種、診断後年数は新規参加者毎に調査した。知りたい情報、学習会及び交流会の感想、研究者への意見は、研究班員が参加したがんサロンの参加者に調査を行い、がんサロンの効果を検討した。

(2) 個別相談のための支援モデル：治療後の問題や自己管理の必要性を知るために文献検討やインタビュー調査を行い、治療後のがんサバイバーの自己管理支援プログラムの作成と検証を行う。

(3) アメリカのがんサバイバーシップケアの視察：

英字文献レビュー⁸⁾では、北米でがん治療後～長期生存がんサバイバーシップケア提供が盛んにおこなわれていたので、アメリカのがんサバイバーシップケアの実際を視察し、がんサロンや個別相談の参考とした。

(4) 倫理的配慮：本研究は、福島県立医科大学の倫理審査と宮城大学大学院(後期博士課程)の倫理審査でも承認されている。がんサロン参加者のアンケート調査や、インタビュー調査では録音と診療情報収集の同意や撤回も自由意思を保証した。

4.研究成果

(1) がんサバイバーへの学習と交流の場の提供

がんサロン開催

本研究を推進するために、福島県、宮城県、山形県のがん看護専門看護師6名の協力を得て研究班を組織した。対象者はがん治療後～長期生存がんサバイバーで診療場所を問わず参加できるものとした。がんサロンの内容は、情報提供の場としての学習会(講義45分)、がんサバイバー(家族・知人、医療従事者含む)の交流会(45分)、個別相談等(30分)の2時間とした。学習会の講義はがんサバイバーが健康な生活を送るための情報提供とする

が、学習内容や学習方法は講師に一任した。参加者には講義資料を保存できるように冊子化したファイルブックを配布した。がんサロンの学習会は、研究班員（がん看護専門看護師含む）、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、臨床検査技師、医療ソーシャルワーカーに講師を依頼し、18件の講義資料の提供があった。交流会を円滑にするためにファシリテーターマニュアルを作成し、自由に話し合いができる雰囲気づくりを大切にするようにした。

がんサロンの実際

最初の3年間は、研究代表者の所在地である福島県で広域サロン、院内サロンを開催した。4年目は、宮城県の保健所と訪問看護ステーション、山形県の専門看護師会の協力を得ることができた。がんサロンは、院内サロン15回、広域サロン6回（福島県3回、宮城県2回、山形県1回）開催することができた。学習会のテーマは、自分の病気を知ること、わが国のがん対策、疼痛管理、補完代替療法、薬剤の副作用、がんのリハビリテーション、がんの検査、食事と栄養、社会保障等であり、院内サロンの概要を表1に示した。参加者の内訳として、がん種、診断後年数は表2、3に示した。参加者の特徴として、広域サロンは壮年期、女性が多く、院内サロンは高齢者、男性が多い傾向を示した。また、広域サロンは初めての参加者と患者の家族や知人が多く、院内サロンは地域に開かれた施設として非がん患者の参加も受け入れていること、同じ医療従事者が学習会を工夫して行ったこともありリピーターが7割を占めていた。広域サロンは、医療施設が異なった参加者への初対面の対応であり、ファシリテートの困難を予想されたが、がん看護専門看護師や保健師等が担うことで臨機応変に対応することができていた。

がんサロンの効果

がんサバイバーの悩みは、治療後も持続している症状（倦怠感、便秘、鼓腸等）の管理と高齢化に伴いがん以外の病気（高血圧、高脂血症、糖尿病等）の管理の仕方だった。また、治療後の経過年数にかかわらず再発の不安があった。さらに、健康的な日常生活の過ごし方として、体力を維持するための食事や栄養に関心があり、高齢に伴い散歩などの運動が難しいことがわかり、学習会のテーマとして取り上げることで情報提供をすることができた。

悩みの相談相手は、家族（夫や子ども）、主治医、待合室の患者同士、インターネットや本、患者会（ピアサポート含む）であったが、院内サロンに参加してからは医療従事者に相談することができていた。悩みの対処方法は、前向きに生きると自分を励ます、術前術後は医師に言われるままだったが知識を広げようと思い学習会や患者会に参加した、同病者と話すことで苦しい治療にも耐えることができた等であった。交流会の効果としては、がんサバイバーにとっては他者との交流を通して、がんと向き合い前向きに生きていることを実感する機会になり、悩みや不安の緩和に役立っていた。また、家族を亡くした参加者にとっては死別後の癒しにもなっていた。

個別相談は、広域サロンでは治療後に持続している症状の管理、好ましい食事と栄養、医療保険や介護保険、薬剤の副作用、就業の仕方等であった。広域サロンではがん看護専門看護師や保健師等が、臨機応変に悩みの解決策の提案等をしていった。院内サロンでのリピーターは、医療者に自分の状態を話したり、相談することを継続することができたことで、自己管理や家族の役割を評価する機会となっていた。

(2) 個別相談のための支援モデル

がん種を特定し頭頸部がん治療後の患者の個別相談を設定した。頭頸部がん患者は治療後の症状として、嚥下や味覚、嗅覚の障害による食事に関連する問題、構音障害や発声機能障害による他者とのコミュニケーションの困難さ、顔貌の変容のボディイメージに関する問題、がんの再発の不安を同時に持ち、多くの問題を抱えながら生活することの困難さが明らかになっている⁹⁻¹¹⁾。患者自身が複数の問題を解決できるように自己管理能力²⁾や病気とともに前に向かうという力¹²⁾を高めることの支援が重要と考えられた。研究代表者が、がん看護専門看護師として勤務する病院で、インタビュー調査を行い、質的帰納的分析を進行中である。今後、この調査をもとに自己管理支援プログラムを作成し、看護相談外来等での活用と検証を継続する予定である。

表1 福島県A病院での院内サロンの概要

	開催月	テーマ	講師	参加人数
1	2015.9.	自分の病気や治療の歴史を知る	研究班代表	16
2	2015.11	リラクゼーション	研究班代表	11
3	2015.12.	栄養と免疫	管理栄養士	14
4	2016.2	痛い痛いのとんでけ	看護師	12
5	2016.6	老いについて	医師	19
6	2016.8	あなたと家族を支えます:	ソーシャルワーカー	22
7	2016.10	がんのリハビリテーション	理学療法士	19
8	2016.12	がん発見につながる検査の有用性	臨床検査技師	17
9	2017.2	抗がん剤の治療と痛みの治療	薬剤師	14
10	2017.5	医師として思うこと	医師	14
11	2017.7	補完代替療法について	看護師	11
12	2017.9	介護保険制度について	ソーシャルワーカー	11
13	2017.11	身体に良い正しい栄養知識	管理栄養士	17
14	2018.1	がんのリハビリテーション	理学療法士	15
15	2018.2	サプリメントと健康食品を考える	薬剤師	12

表2 がんサロンの参加者のがん種

がん種の部位	院内 サロン (人)	広域 サロン (人)	合計 (人)	割合 (%)
乳房	9	6	15	30
子宮・卵巣	0	6	6	12
大腸	8	3	11	22
胃	6	5	11	22
頭頸部	1		1	2
膵、胆管系	1	1	2	4
肺がん	0	1	1	2
血液腫瘍	0	1	1	2
NA	2	0	2	4
合計	27	23	50	100

表3 がんサロンの参加者の診断後年数

診断後年数	院内 サロン (人)	広域 サロン (人)	合計 (人)	割合 (%)
1年未満	5	7	12	24
2~5年	10	11	21	42
5年以上	11	5	16	32
NA	1		1	2
合計	27	23	50	100

(3) アメリカのがんサバイバーシップケアの視察

2018年12月初旬に4名(研究代表者、研究分担者、がん看護専門看護師2名)でアメリカのシアトル地域の視察を行った。ワシントン大学(12/3,12/6)、Fred Hutchinson Cancer Research Center、Seattle Cancer Care Alliance(12/4)、YMCA Live strong、Child's Hospital(12/5)、Cancer Life Line(12/6)で、がんサバイバーシップケアの提供の仕方等について講義の受講、現地視察を行った。主な日本との違いは、がん患者の運動療法を実施し、倦怠感の軽減、筋力や体力の増加などQOL向上に寄与していた。また、高度実践看護師が、診療所や相談支援センターを開業し地域の病院や医療者と連携してがんサバイバーシップケアを実施していた。個別支援のプログラムは、乳がんや血液疾患のがんサバイバーに適応していたが、頭頸部がんの個別支援プログラムは見当たらなかった。アメリカの講師からは、日本でも長期生存者が増えているので我々の研究の意義と継続の支持を受けた。運動療法の意義を痛感したので、広域サロンでストレッチ運動を取り上げた。また、アメリカ視察の報告として運動療法について学術集会で発表することを予定している。

<引用文献>

- 1) 国立がん研究センターがん情報サービス: がんの統計 '14 がん登録・統計 最新のがん統計 (http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html 2014年8月閲覧)
- 2) 吉田久美子, 神田清子: がん患者のセルフケアの概念分析. 日本看護科学会誌 30:23-31, 2010
- 3) Hawitt, M. and Greenfield, S. and Stovall, E: From Cancer Patient to Cancer Survivor Lost in Transition: Delivering cancer survivorship care, The National Academies, 189-192, 2003
- 5) Onishi, K: Oncology nurse's knowledge, beliefs and roles in long term cancer survivorship in the US and Japan, International Society of Nurses in Cancer Care, 25 (1), 7-8, 2013
- 6) Miura A, Matsuda Y, Ogawa I, et al: Oncology nurses' recognition of long-term cancer survivorship care in Japan. APJON 2 (3) ,136-143, 2015
- 7) 三浦浅子他:がんサバイバーシップケアの研究の動向に関する英字文献レビュー、福島県立医科大学看護学部紀要 17号、1-12,2015
- 9) 花出正美, 佐藤禮子: 頭頸部がん治療後5年未満の人々のクオリティ・オブ・ライフ. 日本看護科学会誌 21:40-50, 2001
- 10) 大釜信政, 大釜徳政, 片山知美: 多重的問題を抱える口腔がん患者の Rework Process 及びその影響要因に関する研究. ヒューマンケア研究学会誌 2:11-17, 2011
- 11) 香西尚実, 名越民江, 南妙子: 多重問題を抱える頭頸部がん患者の退院後の生活体験. 日本看護科学会誌 34:353-361, 2014
- 12) 北添可奈子, 藤田佐和: 外来化学療法を受けるがん患者の"前に向かう力". 日本がん看護学会誌 22:4-13, 2008

5.主な発表論文等

[雑誌論文](3件)

- 1) Miura A, Matsuda Y, Ogawa I et al: Oncology nurses' recognition of long-term cancer survivorship care in Japan, Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing (APJON) 査読有、vol2(3) 136-143, 2015
- 2) 三浦浅子, 畠山とも子, 遊佐由美子他: がん患者・家族の悩み相談を受ける看護師の能力開発に関する研究~2年間の教育プログラムの実施と評価を試みて、福島県立医科大学看護学部紀要、査読有、第19号、2017
- 3) 三浦浅子: がん治療完了~長期生存のがんサバイバーシップケアモデルの構築に関する研究 BIOClinica、査読有 Vol32(13): 78-82 2017

[学会発表] (8件)

- 1) MIURA, ASAKO、ONSHI,KAZUKO、TAKASE,KANAE et al : Understanding of survivorship care of Long-term Cancer survivor Patients Japanese Nurses Involved in Cancer patient care, Asian Oncology Nursing Society(AONS), Seoul、AONS2015Abstracts 査読有、29,151
- 2) 三浦浅子、高瀬佳苗、松田芳美他 : がん看護実践者の長期生存がんサバイバーシップケアに対する認識 (第1、2報)、第30回日本がん看護学会学術集会(千葉)、日本がん看護学会講演集、査読有、30 (Suppl.)、230、2016
- 3) 高瀬佳苗、三浦浅子 : がん看護実践者の長期生存がんサバイバーシップケアに対する認識 (第2報)、第30回日本がん看護学会学術集会(千葉)、日本がん看護学会講演集、査読有、30 (Suppl.)、231、2016
- 4) 樋口和枝、三浦浅子、氏家由紀子他 : がん化学療法に携わっている看護師の現状と課題 治療前、治療中、治療後の看護実践のアンケート調査の検討 第14回日本臨床腫瘍学会(神戸)、第14回日本臨床腫瘍学会抄録集、査読有、P2-11、2016
- 5) 清野弘子、高瀬佳苗、林 裕栄 : がんと診断された就労者が職場に感じる言いづらさ、第89回日本産業衛生学会(福島)、産業衛生学雑誌、査読有、58,300、2016
- 6) 高瀬佳苗、三浦浅子、高木孝子 : いわき南部地区の拠点病院におけるがんサバイバーのための健康学習プログラムと交流サロンの展開、第26回日本健康教育学会学術集会(東京)、日本健康教育学会誌、査読有、25 (Suppl.)、195
- 7) 三浦浅子、高瀬佳苗、松田芳美 : 治療後ンサバイバーが求める広域サロンと院内サロンへのニーズの比較検討、第32回日本がん看護学会学術集会(千葉)、日本がん看護学会講演集、査読有、32 (Suppl.) 239
- 8) 三浦浅子、高瀬佳苗、小川ひとみ : 治療後のがんサバイバーへの学習&交流会の意義について~A病院の院内サロンのアンケート調査より~第33回日本がん看護学会学術集会(福岡)、日本がん看護学会講演集、査読有、日本がん看護学会講演集、査読有、32(Suppl.) 267

[図書] 1件

- 1) 三浦浅子 : ヌーヴェルヒロカワ、第11章 症状マネジメント2.嘔気・嘔吐、3.食欲不振 : 大西和子他編集、がん看護学 臨床に活かすがん看護の基礎と実践、第2版、2018、236 - 246、

[産業財産権] 出願状況 0件、 所得状況 0件

6.研究組織

(1) 研究分担者

分担研究者氏名 : 高瀬佳苗 (TAKASE kanae)、

研究機関 : 福島県立医科大学、

部局名 : 地域・在宅看護学部門、職名 : 教授、

研究番号 : 20455009

(2) 研究協力者

松田芳美 (Matsuda yoshimi)、小河育恵 (OGAWA ikue)、渡邊祝子(WATANABE syukuko)、田中久美子 (TANAKA kumiko)

富澤あゆみ(TOMIZAWA ayumi)2018年、齋藤智子 (SAITOU satoko) 2018年、重野朋子(SHIGENO tomoko) 2018年、

大西和子 (ONSHI kauko) 2016年辞退、細野志衣 (HOSONO yukie) 2016年辞退